病院の PFI の推進にむけて
～普及期に入った病院 PFI の狙いと募集選定～

先行事例としての高知医療センター病院 PFI

長瀬　順一　高知医療センター
統括調整監（兼）事務局長

高知医療センターは、中核的な県立病院と市立市民病院の統合整備と本格的な病院ＰＦＩの導入という、今日的な二つの試みに果敢にチャレンジした病院として全国的にも注目を集める病院です。

開院は平成１７年３月、病床数６４８床の高知県全体の基幹病院として急性期の入院医療に重点を置き、救命救急や母子・小児をはじめとする高度医療の提供と地域医療を支援する役割をなど担う公的病院です。

ＰＦＩに関しては、そのメリットを最大限生かすべく施設整備はもとより運営そのものも可能な限り民間にゆだね、三十年の長期にわたり官・民協働で病院運営にあたる、まさに欲張りなＰＦＩの枠組みを設定しています。

さて、開院一年以上を経過し、その評価ですが、ＰＦＩ導入効果の広い意味での評価は、まず、期待された医療が提供できたか否かであります。その点に関して言えば当初病院が目標としていた主要な指標は、ほぼクリアーできたと言えます。たとえば在院日数は１３日前半、紹介率、逆紹介率もそれぞれ６０パーセント目前になっています。特筆すべきは、入院診療単価で旧病院では４万円前後であったものが年平均で５万４千円程度にアップし、入院診療単価は全国の自治体病院の中でもトップクラスの実績を上げることができました。この結果は様々な角度から分析が可能ですが、従来の手法や枠組みではとても達成困難なＰＦＩ効果、病院統合効果の現われだと評価して良いと思います。

一方、運営ＰＦＩに関しては当初想定していなかった課題も表面化しています。ご存知のとおり、全国初のオペレートＰＦＩですので、想定外の問題が出てくることは一定織り込み済みですし、これからも試行錯誤は続くと思います。本案件は、参照する事例のない中、官と民が手探りで議論し仕組みを作り上げてきました。その議論の過程では高い理想を掲げて理念が先行しますが、開院する段になると、スムーズに運営をスタートさせるためには現実的な対応を迫られますし、時間的な制約もあります。したがって、志向してきたＰＦＩならではの新しい病院運形態とは相違する従来方式に近い業務形態が踏襲されることは止むを得ないと思っています。特に、病院運営の根幹にかかわる、薬品・診療材料の購入やＳＰＤ、医事などにその傾向が強く当初の目論見とはギャップがあります。また、ＳＰＣのマネージメントのあり方やモニタリング手法などについては改善点があると感じています。

こうした中、われわれは、この現実を踏まえ、ＰＦＩの原点に立ち返って官民双方が課題を整理し、新しい病院ＰＦＩのモデル作りに着手しつつあります。

幸い、医療のありようは、期待以上の滑り出しを見せていますので、２～３年のうちにはより進化したＰＦＩの仕組みづくりが整えられると信じています。